

〈2〉宮コンは現代の村祭 ～中心市街地活性化の実践報告～

(社)日本街コン協会会長
宮コン実行委員会会長

佐々木 均

1 宮コンとは

現在日本中で開催されている“街コン”のルーツである“宮コン”は、2004年8月に宇都宮で産声を上げた。第1回は4店舗170名、現在では60店舗3,000名の参加がある。

宮コンの目的は、出会いと街の活性化である。宮コンのルールを簡単に説明すると、事前にチケットを買えばイベント時間内は参加店舗すべて飲み放題、食べ放題ではしごが出来る。お店に入ると、男女が相席になる様に案内される。飲食に出会いが付いてくる訳だ。

宮コンは地域の同業者、つまりライバル店との「連携」と「融合」が生んだイベントである。街が活気を失っていたことや若者の酒離れなどの中、もがいたあげく出てきたアイデアだ。



写真1 宮コン受付会場の様子

2 出会いは無駄から始まる

では、なぜ宮コンを初めとする街コンはヒットしたのだろうか？そもそもなぜ若者が街の飲食店に足を運ばなくなったのだろうか？

生活自体に使う時間とお金、そして楽しさの配分が変わってしまったからだとは私は考える。たまの外出でも、インターネットや携帯電話から、検索、口コミ情報、ブログ、予約割引、クーポンなどを駆使して、出来る限り無駄をなくして行動したい人が増えている。

そのこと自体には問題はない。問題はその結果、出会いの時間も省いてしまったことである。出会いは、ほとんど縁と運だ。90%の無駄の上に乗っかっているようなものだろう。食べたいところへなら予約をして店に行き、食べて、満足出来るかもしれないが、出会いはそうはいかない。自分に合う人を探さなければならない。仮に自分の好みを見つけても、今度は自分が相手の好みとは限らない。簡単にはいかないのである。

私の若い頃は、週末ともなれば、何か楽しい出来事、いい出会いを求めて、街の中をあてもなく彷徨っていたものである。勿論、いい出会いなんて毎週見つかるはずもなく、今日も「駄目か」の繰り返しの上で、数ヶ月に1度、ご褒美の様に突如現れたりする訳だ。

無駄を嫌う現代の人たちには、確率が低いことはしたくない。そして、大量の「出会い難民」が生まれている。だが、難民達の本音はどうなのだろうか？「他にも楽しいことはあるけれど、確率よく出会えるのであれば出会いたい」といったところではないのだろうか。街コンは少なくとも、その確率の部分を劇的に上げた。言い換えれば、お互いに出会いを求める人たちを、同じ時間、同じ場所に集めることで、市街地に何倍もの濃い出会いの培養液を作ったのである。それが、ヒットに繋がったのだろう。

その昔、田舎では年に一度、人々を同じ場所に集めて祭を開いた。そこが出会いの場に

なっていたはずである。街コンは言うならば現代版の村祭と言えるのかもしれない。

3 「街」に対する誇りと責任

参加者が1000人を超えた頃から、市街地のホテルが予約でいっぱいになったり、雨でコンビニの傘が売り切れたり、イベント終了時には街中にゴミがあふれたり、と予想していた以上の影響の大きさを知った。そして、私の中で「責任」と「期待」が生まれていった。街という公共のスペースを使わせてもらって開催する以上、集めた人々の行動には主催者側も責任を待たなければならないし、問題を予測して対策を講じなければならない。それが主催する側のモラルでありルールである。

だが同時に、このイベントには、街中に活気を取り戻すヒントがありそうだという期待も持った。

私は常々、自分の住んでいる地域や仕事をしている地域に愛と感謝を感じることを、そして自分の職業、生業に愛と感謝を感じることを大切にしている。私にとって、愛と感謝すべき場所は宇都宮であり、中心市街地だ。生業はバーでありバーテンダーやソムリエであり飲食業である。宮コンのヒットによって街や職業に、これで恩返しができるのかもしれないという大きな期待を持っている。

ただの婚活イベントなら遊園地でだってできる。しかし、これでは市街地活性化にはならない。既存店舗で行われる街コンは、参加店舗のその後の営業にも関わってくる。開催された街にも関わってくるのだ。街コンは、近年人々の中で忘れられようとしている

「街」を再認識してもらふ役割も担っている。

街コンではお店をはしごする。それぞれのお店には個性があり、10m歩いて次の店に入っ

たら、全く別の空間で別の楽しさを体験できる。さらに、街を回遊することで、店と店の間にも新たな街の顔を発見することができる。新しい店や、変わらずに存在する老舗、雰囲気のある路地、セールの看板やイベントのポスター。それこそが、すべて街の魅力なのだ。

近年、どの地方都市にも郊外型のモールや商業施設ができて、商圈が分散し、元々の街が寂しくなっている。だが、街には歴史や文化、人々の記憶や思いなどたくさんの強みがある。街コンはそんな街で行うからこそ、刺激的で楽しいイベントとなりうるのである。



写真2 宮コン加盟店内の様子

4 「連動」が街を元気にする

街コンは個々の店の大幅な増収が目的ではない。寂しくなった街に人を呼び込んで、街の魅力を再認識してもらい、街に活気を取り戻すのが狙いである。このことは、第1回目の時も、3,000名を超えたイベントになった今も変わらない。街コンとは、「市街地という沈みそうな船」に一緒に乗っている仲間（商業者）なのだから、一緒に漕いだり（協力したり）、水をかき出したり（問題解決したり）しようという提案なのである。したがって、街コンは関わった店舗すべてが主体となった、自分の街、自分の職業、自分の店のためのイベントだと言えるだろう。

宮コンを例にとれば、大きくは儲からないが、確実に黒字が出るパーティーが年間数回ある。私は宮コンを「誰も損をしないイベント」と呼んでいる。参加者も安いと感じ、参加店も潤って、酒屋さん、食材屋さんも儲かる。参加していない店でも、参加店が完全貸し切りなので、そこに入れない一般の客や、カップル客が流れるため、いつもより客が1組2組多いと聞く。他業種だってプラスを出すことが出来ると考えている。なにしろ、人は来ているのだ。

市街地を活性化させ、維持・継続させるには、ボランティアでは続かない。黒字を目指さなければならない。すべてが厳しい状況の街中で営業する飲食店や小売店の様な零細な商店では尚更である。勿論、最初から確実な黒字にというのは難しい。だが、原価以上は配分しなければ続けられないし、価値や意味も無くなってしまうだろう。その為には、「連動」が必要不可欠なのである。

ある新聞に宇都宮市にとって宮コンの経済効果は2億円とあった。チケット収入だけで年間約1億円、宮コンの参加者の約30%は県外からの参加というデータもある。しかし、それらは目に見える部分だけの数字だろう。実際はもう少し多いのではないだろうか。

宮コンに出る為に服を買う、美容室やエステにも行くだろう。宮コンをきっかけに結婚したカップルは50組以上いる。出産をした人もいる。それらは必ず経済が伴うのだ。テレビ出演や新聞の掲載を、宇都宮市の宣伝広告費と考えるなら、それはかなりの金額になるはずだ。

黒字を目指さないと駄目だと言ったが、もとよりお金を出しても来なくなる街中活性化イベントを考えなければ、継続できない。その上で、街コンを定着させて、参加店舗の収

入を安定させ、閉店の危機を回避させられれば、そこにかかわる取引業者や大家、従業員だって助かる。積極的に関わってくれば、他業種の方だって、そこにビジネスチャンスはあるはずである。

街コンは、飲食店の横の連携が大きな魅力を生んだイベントだ。だが、他の職業でもこのことはヒントになり得る。直接商売には繋がらなくても、様々な職業の横連携イベントを街中で開くとおもしろいと思っている。歯医者さんの啓蒙イベントや学校の先生の文化祭イベントなど、それなりに意義のあるものになりそうな気がする。

5 街中イベントは愛と感謝で行う

ここまで、成功したイベントとして話をしてきたが、現在もこの先もずっと問題がないのかと言われたら、そうとは言い切れない。

現在、日本中で大小様々な街コンが行われ、その数200~300と言われている。だがそのほとんどがせいぜい4、5店舗、100人から200人で開く規模のものである。1,000人以上のイベントはまだ15、6カ所というところだろう。

街コンが乱立するなか、地元と縁もゆかりもない街コン専門業者の存在が問題になっている。業者を頼めばその分だけ配分は減る。新たに問屋が出来る様なものである。結果、予算が減り、イベントの質の低下に繋がる。ましてや、そんな搾取された状態では志ある店舗が参加することはないだろう。参加店舗や人が集まらずイベントが開かれなくても、業者には違約金として、主催者からお金が入るシステムになっている。そのため主催者は無理してでもイベントを開こうとし、その結果、粗悪な街コンを生んでしまう。

中には犯罪的なものも存在し、それらはす

べて、主催者の連絡先や参加店の情報が見えない仕組みになっている。参加店舗に対する審査もなく、店を宣伝している業者の存在にも問題があると言わざるを得ない。このままでは、非合法的な集団や、はじめから詐欺を目的にした街コンを生み出す温床になってしまう。そうなれば、健全に運営している街コンの主催者も巻き込まれてしまうだろう。

街中のイベントは愛と感謝で行うべきものである。市街地は公共の場であり、市民の財産なのだ。ましてや街の名前をつけたイベントなら絶対にそうすべきである。

街に根付き、街を想って、健全な運営をしている街コン主催者達と連携をとり、「安全・安心」を旗印に、情報交換や宣伝の共有をするべく、2012年10月に「社団法人日本街コン協会」を設立した。翌月21日には第1回の「街コンサミット」を開催し、その日を「街コンの日」と制定した。これは、いい夫婦の日（11月22日）の前日にあたり、「明日はいい夫婦になれます様に」との願いを込めた。

協会の設立、運営によって、街コンの健全化の推進、新たな街コン発足や継続の為のサポートを考えている。我々「日本街コン協会」の参加団体は、強固な連携を持ち、主催者の顔が見えない団体との差別化を進めることで安全、安心を主張していくつもりである。

私は街コンがなくなることはないと思っている。近い将来、ごく普通の家庭で「お父さんとお母さんの出会いは街コンだよ」、「お前ももう25なのだから街コンに行ってい」なんて会話が聞こえて来る日が来るだろう。

6 街コンは日本を救う

私は、街コンを国の施策にするべきだと考えている。これはかなり本気で、である。大

量の「出会い難民」を生み出してしまったこの社会はどこか歪んでいる。愛する相手を探すこと、生涯のパートナーを見つけたいと願うこと、子孫を残したいと思う気持ちは生き物の根源的なものであるはずだ。しかしそれが希薄になっていると言わざるを得ない。何より社会全体でそのことへ取り組むことへの必死さが感じられない。

恋愛はすべての行動の原動力になる。おしゃれをする、共に食事をする、旅行をする、相手の喜ぶ顔がみたくて背伸びをしたくなる、現状以上を望むし、相手の想像以上のことをしてあげたいと考える。それらはすべてが消費行動につながる。恋愛の効用だ。恋愛の衝動に伴う消費行動の代償として、今まで以上に仕事に励む、つまり生産性も向上する訳である。

恋愛のその先には結婚がある。家庭を持つことで、今迄1DKにパソコンとエアコンと電子レンジがあれば充分だった生活が、2LDKでも狭くなる。マンションを買い、家を建てるなんてことになる。車だって軽自動車や原付バイクだってよかったものが1ボックスやセダンを買うことになる。結果、内需拡大だ。子どもが生まれたら、それはもうすべて内需である。もう生まれたのは、子どもなのか内需なのか分らないぐらいなのだ。しかし、子どものためならそれが頑張れるのだ。そろそろ嫁の為には頑張れなくなっていたとしてもである。子どもの為ならば必死の努力で日本の生産を引き上げることが出来る訳である。

街コンは現代の村祭、出会い難民の救済所。出会いの濃い培養液の中で効率よく出会い、恋をしてもらい、日本を明るく楽しく救おうと考えている。愛は地球を救う。恋愛は日本経済を救うのである。